

高浦勝義先生 略歴



<生年月日>

昭和20年1月1日

<学歴>

昭和38年 4月

大分大学 教育学部 教育学専攻科 [教育学士(教育学)]「ジョン・デューイの学習指導論」(昭和43年3月まで)

昭和42年 3月

小学校教諭1級普通免許状

昭和42年 3月

教育学士

昭和43年 4月

九州大学大学院 教育学研究科 教育方法学専攻 修士課程入学

昭和45年 3月

九州大学大学院 教育学研究科 教育方法学専攻 修士課程修了 [教育学修士]

昭和45年 3月 教育学修士

昭和45年 4月 九州大学大学院 教育学研究科 教育方法学 博士課程入学

昭和48年 3月 九州大学大学院 教育学研究科 教育方法学 博士課程単位取得後退学

平成20年 9月 教育学博士

<職歴>

昭和51年 9月 国立教育政策研究所 (旧国立教育研究所) 初等中等教育研究部 初等中等教育研究部長 (平成17年3月まで)

平成17年 4月 明星大学 人文学部 心理・教育学科 (教育学専修) 教授 (平成22年3月まで)

平成22年 4月 明星大学 教育学部 教育学科 教授 (現在に至る)

<所属学会および活動>

昭和48年 3月 日本カリキュラム学会 (国内学会) 会員 (現在に至る)

昭和48年 8月 日本教育学会 (国内学会) 会員 (現在に至る)

昭和51年10月 日本教育方法学会 (国内学会) 会員 (現在に至る)

昭和59年 日本デューイ学会研究奨励賞

平成 4年 日本デューイ学会 (国内学会) 会員 (現在に至る)

平成 4年 日本デューイ学会 (国内学会) 理事 (現在に至る)

平成 4年	日本生活科・総合的学習教育学会（国内学会）会員（現在に至る）
平成 4年	日本生活科・総合的学習教育学会（国内学会）理事（現在に至る）
平成10年 4月	National Middle School Association（国際学会）会員（平成19年12月まで）
平成17年10月	日本高等教育評価機構「評価員」（平成20年3月まで）
平成19年 4月	上智大学大学院総合人間科学科研究科非常勤講師（現在に至る）
平成20年 7月	学習指導要の改善協力者（高等学校の総合的な学習の時間の解説書）（文部科学省）（現在に至る）
平成20年 7月	日野市教育センター「教職員研修の在り方」研究委員（平成21年3月まで）
平成20年10月	日本高等教育評価機構「評価員」（平成23年3月まで）
平成20年11月	教育研究開発企画評価会議協力者（文部科学省）（平成21年3月まで）

<著書>

1. 生活科の考え方・進め方 単著 平成元年（黎明書房）
2. 生活科における評価の考え方・進め方 単著 平成3年（黎明書房）
3. 子どもの「個性化」と教育課程の編成 単著 平成8年（学校五日制と教育課程の創造 黎明書房）
4. 生活科の「支援」の特質とその教育的意義 単著 平成8年（戦後50年、いま学校を問い直す 明治図書）
5. 生きる力と学校のゆとり 単著 平成9年（生きる力をはぐくむ ぎょうせい）
6. ミドル・スクールにおけるカリキュラム統合の実践 単著 平成10年（カリキュラム開発をめざすアメリカの挑戦 教育開発研究所）
7. 総合学習の理論・実践・評価 単著 平成10年（黎明書房）
8. 個性を生かす教育活動 単著 平成11年（ゆとりある教育活動 基礎・基本と個性 ぎょうせい）
9. ポートフォリオ評価法入門 単著 平成12年
10. 生活科の理論 共著 平成13年（黎明書房）
11. 生活科の授業づくりと評価 共著 平成13年2月（黎明書房）
12. 学力低下論批評 共著 平成13年8月（黎明書房）
13. 問題解決評価—テスト中心からポートフォリオ活用へ— 単著 平成14年7月（明治図書）
14. 絶対評価とルーブリックの理論と実際 単著 平成16年1月（黎明書房）
15. 生活科の理論—平成20年学習指導要領対応 共著 平成21年2月（黎明書房）
16. 生活科の授業づくりと評価—平成20年学習指導要領対応 共著 平成21年2月（黎明書房）
17. デューイの実験学校カリキュラムの研究 単著 平成21年10月（黎明書房）
18. 指導要録のあゆみと教育評価 単著 平成23年3月（黎明書房）

<学術論文>

1. デューイの実験学校カリキュラムの研究 単著 昭和48年14（日本デューイ学会紀要）

2. オープン教育とデューイーデューイへの言及の特質 単著 昭和57年 23 (日本デューイ学会紀要)
3. オープン教育とデューイーニューヨーク市を中心としたいくつかのオープンスクールを訪ねて— 単著 昭和60年 26 (日本デューイ学会紀要)
4. コア・カリキュラム連盟の「三層四領域」論とJ.Dewey 単著 昭和61 13 (国立教育研究所研究集録)
5. 戦後初期「社会科」とJ.Dewey 単著 昭和61年 12 (国立教育研究所研究集録)
6. 学習到達度に関する分析的研究 単著 昭和62年 114 (国立教育研究所紀要)
7. 画一化教育から個性化教育へ 単著 平成元年 30 (日本デューイ学会紀要)
8. 生活科研究推進校における「生活科の評価」実践の分析的検討 単著 平成3年 23 (国立教育研究所研究集録)
9. 生活科とJ.デューイ 単著 平成5年 34 (日本デューイ学会紀要)
10. 統合的カリキュラムづくりと問題解決学習 単著 平成10年 (日本デューイ学会 紀要第39号)
11. 生活科と「総合的な学習の時間」における学習の同質性について 単著 平成12年 (7) 28-33頁 (せいかつか)
12. 「総合的な学習の時間」の創造とJ.デューイ 単著 平成13年 (42) (日本デューイ学会紀要)
13. デューイ実験学校における中等教育期のカリキュラムについて 単著 平成20年 日本デューイ学会紀要 (49) 43-52頁 (日本デューイ学会)
14. ジョン・デューイの実験学校カリキュラムの研究 単著 平成21年3月 博士論文 (明星大学) 1-223頁
15. 教育評価研究と生活科、総合的な学習 単著 平成23年3月 せいかつか&そうごう (第18号) 56-63頁 (日本生活科・総合的学習教育学会)

<その他>

1. ミドル・スクールのカリキュラム編成における「統合化」の試みについて 単著 平成8年 (日本生活科教育学会機関誌 (初教出版)「せいかつか」) (3)
2. 総合学習の理論 単著 平成9年 (総合学習の理論 黎明書房 編著)
3. ティーム・ティーチングによる指導の効果に関する研究 (第三次報告書) —学力達成及び価値・態度形成をめぐるティーム"ティーチング"による授業の効果に関する調査結果 単著平成11年 (科学研究成果報告書)
4. 中学校・総合的な学習の展開23例 単著 平成11年 (編著 大日本図書)
5. 小学校・総合的な学習の展開26例 単著 平成11年 (編著 大日本図書)
6. 適正な学校・学級規模に関する校長及び教員の意識と指導及び勤務の実態に関する調査結果 単著 平成12年 (科学研究費 (特別研究促進費) 報告書)
7. 児童生徒の学習状況及び学力形成とクラスでの生活意識に及ぼす学級規模の影響に関する調査結果 単著 平成13年 (科学研究費補助金研究成果報告書)
8. 学力低下論批判 共編著 平成13年 (黎明書房)
9. 研究成果報告書『総合的な学習の時間の授業と評価の工夫：評価規準及び評価基準を

- 介した指導の改善、自己学習力の向上及び外部への説明責任に向けて（第一次、二次、三次・最終報告書）』単著 平成15年（国立教育政策研究所）
10. 科学研究費補助金基盤研究B研究成果報告書『ポートフォリオ評価を活用した指導の改善、自己学習力の向上及び外部への説明責任に向けた評価の工夫（第一次、二次、三次・最終報告書）』単著 平成15年（科学研究費補助金基盤研究B研究成果報告書（研究代表者高浦勝義））
 11. 学力の総合的研究 平成17年3月（黎明書房）
 12. ルーブリックを活用した授業づくりと評価①、②、③ 共著 平成18年8月（教育開発研究所）
 13. デューイ実験学校における中等教育期のカリキュラムについて 平成19年10月 日本デューイ学会（奈良県）
 14. 教育課程の編成と評価 共著 平成21年10月（明治図書）
 15. 学習意欲を高める指導の充実と振り返り 共著 平成22年1月（教育開発研究所）
 16. ルーブリック導入の意義と課題 単著 平成22年12月（看護教育2010年12月）

高浦先生のご定年によせて

佐々井 利 夫

高浦先生のご定年を迎えられることは、月並みな言い方ではあるが、年月の経過の早さを改めて感じさせられるのである。出会いは1982年の秋、確か東京家政大学で開催された日本デューイ学会において学会の研究奨励賞を先生と私が受賞したことが始まりであった。もうそれから30年以上経過したことにいささかの感慨を覚えるのである。

いくつかのエピソードを取り上げ、思い出の記としたい。

先生は、長く国立教育研究所（現国立教育政策研究所）にご勤務されており、デューイ研究、個性化教育に関する研究、総合学習の授業と評価に関する研究など、次々に成果を世に問うてこられた。私は、上述のデューイ学会や生活科・総合的学習教育学会などでの先生のご活躍ぶりを拝見させていただいていたが、親しくやりとりさせていただくことになったのは、10数年前からである。その頃、ご長男が明星大学の人文学部教育学専修（当時）に在籍して私のゼミに所属したり、ご長女も小学校教員の資格を取得するために通信教育部に在籍され、スクーリングの総合演習（当時）を偶然私が担当したりしたことがあった。これだけのご縁があればご協力いただけたと考え、通信教育のテキストとして生活科についての2冊の書を共著で出すことを申し出たところ快く応じていただいた。そのことが今日の先生と明星大学とのつながりの第一歩ではなかったかと、今では思われる。

10年前に、通信制大学院（教育学）に博士後期課程を設置することになり、設置準備委員会として授業研究領域で適切な方を人選することとなった。そこで高浦先生をお招きすることになり、今日に至るのである。

通信制大学院の学生はすでに社会でご活躍されている方々が大部分であるが、先生のゼミには学校教員が多く所属されていた。つい先日、人づての話であるが、先生のご指導で博士論文を作成された元中学校教員の方が都内の女子大で非常勤講師をされており、高浦先生への感謝の気持ちを述べておられた、ということである。私も昨年、看護専門学校で授業を受け持ったが、そこの副校長は、本学の通信制大学院で先生のご指導により修士論文を作成されていた。また、これもごく最近であるが、生活科やデューイ研究を専門とするある大学教員が、彼自身の博士論文を作成する際に、高浦先生の評価に関するご研究が契機となった、と述べておられた。

通信制大学院やご著書を通じて、先生の教育・ご研究の成果が後に続く方々に影響を与えていることのこのような証左は、先生のご努力の賜物と考えられる。

本年10月に日本デューイ学会の第59回大会を明星大学で開催の予定であるが、その成功が先生の学恩に報いる絶好の機会と考え、準備に追われているところである。

これからのご研究の進展はもとより、奥様と子ども先生のご健康とご多幸を祈念申し上げます。